

## 卷 頭 言

近來宗祖御遺文の研究方法は宗祖の御自筆いわゆる御眞蹟遺文（全体或は部分の存するもの）、曾って存在していたことが確實なもの、鈴木一成先生はこれを「曾存」と名づけ、この名称を「昭和定本日蓮聖人遺文」編纂上の用語として用いられたので現在ではこの名が定着している。次に宗祖直弟の親写本の存するもの、更に古來眞撰として認められ問題のないものを中心として宗祖の生涯・行動・教學・思想を確認しようとしている。勿論、従来より確實な遺文によって宗祖に直参せんとする試みはあった。例えば録内、録外による価値判断は古くから注目されていたが、録内外の区別は実質的な判定の基礎にはなりえなかつたから一部の門流以外には重視されなかつた。然し各門家が自門に有利な証判を得んとして偽書乃至類似遺文を作り、これを宗祖の御書と誇揚するに至って宗祖の遺文は玉石混淆の様態を呈するに至つたのである。先師はこれを正さんとして疑偽書への批判、祖書の目次を製作することによって遺文の整理を行ない一応の成果をあげることができた。

晩近になつて山川智応・浅井要麟両先生が新しい方法論に立つ遺文研鑽法を開拓され、現今ではこれら研究業績をふまえた研究が相ついでよい成績をあげている。

この風潮は遺文研鑽上歓迎すべきもので、たしかにこれによって種々の夾雜物をのぞき、宗祖聖人の眞の姿を知ることができらるであらう。しかしこれのみでは不充分であるといわざるをえない。この方法、作業と同時に、宗祖滅後直弟等の時代に成立した偽疑・類似遺文には、その時代に特有の伝承があり、遺文自体では解明しがたいものを補い、

遺文の真意を知らしめるものも少なくない。学者はこれら取捨すべきものを消化して行く努力を忘れてはならぬ。近時の遺文鑽仰・研究の華々しい成果を喜ぶと共に埋没し易い疑偽・類似遺文の扱いに充分な配慮をおこたらぬよう注意をうながし学者の自重を望むものである。

平成四年三月二〇日

学長 宮 崎 英 修